

## 第2回青森県生涯学習審議会会議録

日時	平成27年3月27日(金) 14:00～16:30
場所	青森県警察本部 6階 教育委員会室
出席者	<p>《 委員 》 敬称略 11名 (欠席4名)</p> <p>荒川 由美子 太田 博之 岡 詩子 工藤 清子 駒井 昭雄          澁谷 尚子 春藤 千秋 出崎 真里 西澤 ナミ子 増田 由美子          三上 亨 (浮木隆) (上野修子) (鹿内葵) (原英輔)</p> <p>《青森県教育委員会教育長》 中村 充</p> <p>《 事務局 》 4名</p> <p>中野 聖子 (生涯学習課長)          渡部 靖之 (学校地域連携推進監)          森田 勝博 (企画振興グループマネージャー) 他1名</p> <p>《 その他 》 2名</p> <p>葛西 浩一 (学校教育課 学校教育企画監)          長谷川 豊 (総合学校教育センター 教育活動支援課)</p>
内容	<p>1 開 会</p> <p>2 教育長挨拶</p> <p>3 案 件 (1) 審議テーマについて          (2) その他</p> <p>4 閉 会</p>
配付資料	<p>次第          青森県生涯学習審議会委員名簿          座席図</p> <p>資料1 審議テーマについて</p> <p>資料2 第12期青森県生涯学習審議会のスケジュール(予定)</p> <p>参考資料1-1 まち・ひと・しごと創生長期ビジョンー概要ー</p> <p>参考資料1-2 まち・ひと・しごと創生総合戦略ー概要ー</p> <p>参考資料1-3 まち・ひと・しごと創生「長期ビジョン」と「総合戦略」の全体像</p> <p>参考資料2 第1回青森県生涯学習審議会会議録</p> <p>参考資料3 事業説明資料 (アクティブシニアによる地域の未来応援事業、あおもりで「生きる・働く」を学ぶキャリア教育実践事業、子どもの読書活動推進事業)</p> <p>〈配布資料〉</p> <p>〈冊子〉青森県子ども読書活動推進計画(第三次)</p> <p>〈冊子〉公民館でまちをイキイキ!地域で考え行動する公民館機能活性化事業 成果報告書</p> <p>〈冊子〉地域の教育力によるたくましい高校生育成事業 事業報告書</p> <p>〈冊子〉PTAプラスCで 地域ぐるみで子どもたちを育てよう!!～PTAプラスCで地域いきいきモデル事業 事例集～</p> <p>青森県総合社会教育センター平成26年度研究紀要</p> <p>青森県総合社会教育センター所報「響」No.101</p>

## 会 議 の 内 容

(◇会長、副会長 ◆委員 ○事務局)

### (1) 審議テーマについて

※資料1、参考資料1-1～1-3に基づき、事務局から説明

◇ 前回10月の会議後、ある委員から、「具体的に審議テーマが示されていないのであれば、会議で話し合うのもいいが、グループに分かれてワークショップをし、意見をまとめたらいいのではないか」といった御意見をいただいた。事務局と相談し、会議時間等の制約もあるため、今回は会議録をもとに、事務局でワークショップの結果となるような資料にまとめた。文字だけが並んで分類されているよりも、大変わかりやすい資料ができたと思う。今回はこの資料の中でテーマ案が提示されているが、これはあくまで皆様の御意見を取りまとめて形にしたものであり、決定しているものではないということをご理解いただいた上で、これから皆様の御意見を落とし込み、テーマを決めたいと思う。

では、順番に、お一人5分程度で、前回のご自分の発言も振り返りながら、言い忘れたことや、資料1について直接御意見をいただく形でもよいので、御発言をお願いします。

◆ 前回の会議では、つながるきっかけを打ち出したらよいのではないかという意見を述べた。私の住む地域は、市町村合併によって市に組み込まれた地域である。人口減少も著しく、小学校への入学も激減している。仕事で地区にある幼稚園や保育園を訪問した際、保護者の仕事が市中心部にあることから、子どもの小学校入学を機に市中心部へ転住する家庭が増えていると聞いた。

地域で活動する人の構成として、若い保護者の世代が少ない。子育てを支援する人財育成講座の参加者を見たら、多くがおばあさんで、しかも、孫もすでに大きくなり都会へ出て行ってしまった方ばかりが参加していた。講座のあり方等も含め、根本から考え直す必要があると思った。

子ども会も老人会も、町内会すらもなくなっている状況である。以前は市政だよりなど町内会を単位として回ってきたが、最近は申し込みをして郵送されるか、あるいは用事で庁舎に行った際に自分で持ってくるというやり方になった。回覧板を使った地域のつながりもなくなってしまった。

人口減少と学校の統廃合は、地域の元気がなくなる原因であると感じている。ここ数年で、複数あった小学校がひとつに統合され、さらに小中一貫校に変化した。以前学校があった地域では、登下校時など子どもの声が聞こえていたが、最近ではそのような風景もなくなり、一日の中での変化がなくなってしまった。

市の公民館審議員をしているが、中央館以外に館長がいなくなってしまった。地域には公民館もなくなってしまうのかと感じた。生涯学習というテーマを前にして、いろいろと考えてみるが、私の住む地域では、一体何をどうすれば地域が元気になるのかわからないというのが本音である。

◇ お一人目から大変重いお話を伺うことができたが、だからこそ、国はいま総合戦略の策定に動いているわけであるし、県も未来を変える挑戦において、2030年までに何とかしようとしている。

このような中で、教育長もおっしゃられたように、生涯学習に寄せる期待は大きく、重要な視点になる。

以前は限界集落が問題とされていたが、今は限界自治体になってきている。我々の中にもこれからいろいろな地域において総合戦略に関わる方もいるのではないかと。

そのような視点も大事になってくるのではないかとということで、事務局から国の総合戦略に関する3つの資料を示したということは、今の委員の話でも裏付けられたのではないかと。

◆ 前回、生涯学習の捉え方のお話をさせていただいた。今日の資料を見て、第10期あるいは第11期と違って、かなり総合的なテーマで、生涯学習の考え方に近づいたと思う。

生活をしていく上での地域の課題は、自分たちで考えていく必要がある。これを根底に、地域の良さや子どもたちに伝える学びというのを考えていかなければならない。前回、社会教育と生涯学習は違うのだということを申し上げたが、私の考えの根底は社会教育の考え方である。これをさまざまな分野、たとえば農業、商工、観光といった場面で考えることは、地域住民が自主的に考える手助けになるのだと思う。また、そうなるよう行政が動いて、住民に危機感を持っていただかなければならないと思う。行政が何かしてくれるのではという時代はもう終わりである。

地域から学校がなくなると、とてもさみしいというのは事実だと思う。私の住む地域でも、小学校が10から4に、中学校が4から2になる。学校とともにやってきた行事がどうなるかは、地区協議会や学校と話し合いながら解決していくしかないと思っている。統廃合がなされてからではなく、その前から考えておかなければならない。

余談だが、鹿児島県の「やねだん」では、300人ほどの小さな集落で、15年ほど前に地域の高齢者を中心としてサツマイモを栽培し、焼酎を作って販売した利益を住民に還元するという取組をした。行政に頼るのではなく、地域住民が自ら何かをしななければならないという意識は、日本の南の地域では盛んだという印象がある。青森県でもこういった住民の意識を高めることが必要で、地縁団体などによる、地域の良さを伝える活動をする必要があると思う。

生涯学習の捉え方が、個人の学習から広域になったということで、第10期、第11期から比べて大きく方向転換され、大変面白いテーマだと思う。

◇ 中教審ではコミュニティスクールを推奨するという方向にあり、青森県でも準備を進めている所があるという話を聞くが、これは学校を核としたコミュニティであるものの、その学校自体がなくなっていく現状では、生涯学習の方向としてどうなのかということもある。

黒石市のまちづくり推進計画には、まちづくりの中に生涯学習がきちんと落とし込まれており、教育委員会ではなく、首長部局の企画財政部が担当している。こういった県内でも先進的な取組をしていても、住民意識や地域の問題などでまだまだ問題があるということは、さらに解決に向けた取組が必要なのだということがわかった。

◆ テーマ案の「子どもたちに伝えるための」という部分だが、「子どもたち」を抜いたらどうか。子どもたちが大事であるというのはわかるのだが、人数は少なくなっていることから、まずは人数が多くいる大人たちが楽しむ方向を考えればよいのではないか。大人も子どもも両方と考えると、範囲が広すぎて、何でもできる反面、何をしてもよいのかわからなくなってしまう。現在活動をしている、まさにこの審議会の委員のような方はいいのだが、そのまた周辺にいらっしゃる、あまり積極的ではない方々にも何をしたいのか考えてもらい、地域に生かしたいと思うのであれば、自分がどう楽しんで、地域のために役立つかというのを落とし込むまで考えることができる人を増やしていくことが必要だと思う。先ほど、学校がある前提でこれまで行ってきたイベントや行事があったという意見があったが、学校がなくなるとどうしてよいかわからなくなってしまう。そこで、大人が学校を拠点としなくても自分たちで楽しもうとするような方向に行けば、子どもはその姿を見て地域の魅力を感じるのではないか。例えば挨拶をしようとして子どもに教えても、大人がしていなければなんだということになる。大人が楽しんでいるイベントを小さい時から見ていれば、子どもがやがて大人になったときに、自分たちで楽しむために動くようになるのではないか。

◇ 現代は「あれもダメこれもダメ、あれもこれもなくなった」というような悲壮感があり、気が付かないうちに子どもたちに映る大人や地域の姿が、楽しくないものに映っているのではないか。そのような意味で、あえて子どもたちに伝えるということではなく、大人が自ら楽しみ、子どもはその姿を見て自ら理解するのではという話であったと思う。

○ テーマ案としてお示ししたのは、言葉足らずで申し訳ございません。「子どもたちに伝えるための」の後に、「大人の」という言葉が隠れています。子どもたちに地域の良さを伝えるために、大人が楽しんだり、学んだり、活動している姿を見せるという、そういった意図がありました。「大人」という言葉を入れればよかったのですが、決して子どもと一緒に楽しむといったような、直接かかわることだけではなくて、大人が楽しむことによって子どもが地域の良さを知っていくということでもあります。下の方に書いてありますが、地域の次の担い手が少なくなっているからこそ、子どもたちを地域に根付かせるような働きかけをしなければならないのではないかとこのところからの提案であります。

◇ 只今は審議テーマについての議論であるが、実は次に「審議の柱」の議論に進んでいくこととしており、事務局の発言は、下に記載してある中の「大人の主体的な学び」であり、青森の良さを伝えるために、大人の主体的な学びがどうあるべきかということである。これも含めながら見ていただきたい。

◆ 前回の会議では、自分の子どもが青森を出たいと言っているというお話をしたが、進路は県内の専門学校進学に決まり、青森に残って頑張るということになった。ただ、青森には何もないとまだ言っているし、ちょうどこの時期は、首都圏に進路を決めた友人が青森を離れていくときで、「向こうに行ったらこういうことをやる」という話を聞き、うらやましくてしょうがないようである。本人の夢はプロボクサーになることだと言っているが、県内にはプロになるためのライセンスを取ることができるジムがないらしく、「青森県は夢をかなえられる県ではない」と話している。確かに、そのような大きいことを成し遂げるときに、そのチャンスがあるのだろうかと考えてしまった。ただ、チャンスというのは自分でいくらでもつなげることができると思うので、今やるべきことをやるしかないのだという説得をするしかなかった。

先日、仕事で子どもと同世代の生徒から話を聞く機会があった。「地域の大学生が地域を活性化するにはどうしたらよいか」というテーマで考えているグループである。弘前は大学が多く学生の街で、県内から来てる学生もいるが、県外から来た学生が、県や市のことを真剣に考えてくれていることがわかった。大人は何となく地域で暮らしているのに、県外から来た若い人の真剣さに驚いた。子どもたちの方が真剣に考えて、青森県の良さを発見しているので、その世代と大人の世代と一緒に話すことで、もっと新たな魅力を発見できるのではないかと。

年代を問わず交流の場になっているのは、お祭りではないか。祭りの中で大人が子どもたちに様々なことを教えてくれる。地域のつながりの中で高齢の方も教えることが楽しいと話しており、自分も地域の祭りに出てみたいと感じるようになった。子育て支援の仕事もさせてもらっているが、支援員も高齢の方が多く、子どもたちや若い方にいろいろなことを教えたいと考えている。御年配の方との交流を増やす取組をするのがいいのではないかと考えている。逆に、御年配の方々は自分たちの価値観というものがあって固まっている部分があるので、若い方と接する時に、古い考え方が出てきてしまっているのではないかと、という話が会の中でも出ている。先日、ワークライフバランス、カジダンイクメンのフォーラムに携わることがあったのだが、中央ではこのような価値観がすごく進んでいて、男性も積極的に活動し、女性にも良い影響を与えていると思い、お互いに吸収できることがあると思う。

地域の知恵袋のような存在の方々と、県外からの学生と、地域の中で夢をかなえたくて悶々としている方が一緒になって、楽しめるものを見つけながら活動することが大事なのではないかと考えた。

◇ 話の中にあつた、大学生が地域のことについて考えてくれているというのは、青森県に魅力がないと感じて新たな魅力を作ろうとしているのか、青森県の良さを感じたうえで、それをより広く発

信しようとしてくれているのか。

- ◆ 学生として他県からやってきて、これから数年過ごす土地のことを知りたい、というのが最初にあるようだ。街を知ろうとして調べているうちに、歴史のあるものに出会ったり、道の狭さと一方通行の多さにどんな意味があるのか、というところから始まって、調べを進めるうちにわかった良さや伝統といったものを、どういう手段を使えば効果的に伝えられるのかということを考えているようだ。

◇ インターネットである調査結果を見たら、一生のうちに一度も行かないであろう都道府県はどこかとの質問に、第1位が佐賀県、第2位が青森県、第3位が沖縄県であった。外から訪れる方は、その場所の良さに気付いているが、そこに住んでいる人が良さをわかっていない。認識を新たにしなければならぬのではないかと。今の話にもあったように、住んでいる人たちがマンネリ化してしまっていて、周りにある価値あるものでも、ダメなものだという風潮が広がってしまっているのではないかと。

- ◆ 今別で先日、「荒馬ワールドカップ」が開催された。たくさんの方がおいでになり、大変盛り上がった。県外からいらした方も踊ったり、若者の部、シニアの部などが行われ、お祭りは大変素晴らしいものだと感じた。青森公立大のグループも参加してくれた。これまでは宮城や東京の学生とは交流があったのだが、最近になって県内の学生が参加してくれるようになった。これによって地域が活性化しているのを見て、とても感動している。

町には働き手が少なく、子どもを産んでからそれほど期間がないうちに仕事に復帰して働いている方がいる。せめて1歳半くらいまでは親の手で子育てをさせたいと思っているのだが、何かしらの子育て支援を考えなければならぬと考えている。

◇ 祭りに限らず、若い方が関係してくれることが増えると街が活気づく。新しい風というのはそういうことなのだと思う。

- ◆ 前回の会議では、学校支援コーディネーターの活動をとおして、地域の良さを子どもたちに伝えていくのは大人の役目なのではないかという話をさせていただいた。その後の活動において、学校の30周年行事があることから、歴史をまとめるにあたって地域の方々からさまざまな視点で語っていただく仕組みづくりを行った。開校当初は生徒だった保護者も含め、地域の方においでいただき、当時の学校の様子や周辺の様子、日常生活にともなってどんな遊びをしていたかなどを語っていただいた。

また、総合学習の場面でも地域の方が学校に関わる機会が多くあることがわかった。地域に残していきたいものを学ぶという時間の締めくくりとして、地区のねぶた実行委員の方の話を聞いたり、霊園の歴史や著名な方が眠っているという話を聞いたり、三内丸山遺跡でボランティアガイドをしている方の話を聞くなどした。このような話は子どもたちの心に強く響くということが、そばにいて理解できた。また、話をしてくださる方は、人前で話すのが得意ではなかったり不安に思っていることが多いが、これまでやってきたことを話して、質問が出ればそれに答えて、もし答えられなければ一緒に調べてみるなど、緊張しないで取り組んでいただくようアドバイスしている。話してくださる方々は、一生懸命になって事前に調べ物をして準備してくださったり、自信のない部分を調べ直してくれたり、子どもたちがわかりやすいようにと写真を準備してくださるなど、話す側にとってひとつの学びの機会になっているのだと感じるし、実践によって自信につながっていると思う。

実践者の家族も喜んでいる事例がある。学校での活動の様子を写真で見せたり語ったりする姿が

とてもうれしそうで、その姿を見た家族も喜んでいる。

小さな積み重ねが地域の方を元気にしたり、元気な大人を見ることで子どもたちも元気になっていると感じている。

自分の子どもが県外の大学にいるが、青森を離れて、青森の良さに気付いているようだ。私は県外出身だが、青森に来てやりたいことができたし、それをサポートしてくれる人もたくさんいる。子どもたちを見ていて、青森にないものを求めて県外に出ていくことは仕方のないことだとは思いますが、客観的に青森を見ることで、青森の良さに気づき、帰ってみたいと思い、いずれ青森に戻って何かしてみたいと思ってもらえれば良いと考えている。

- ◇ 子どもたちはこの先どこに住むかわからないし、我々もこの地域に住み続けるのかはわからない。世の中が変わってきている中で、この地域に残していきたいものがあると思う。あれもなくなった、これもなくなったといっているが、では、地域の人たちが残したいと思っているものを、本当に命がけで守ろうとしてきたのかというと、実はそこにはこだわってなくて、なくなりたいと思っていたものがなくなっているという現実がある。したがって、これからは残していくためには努力が必要である。

キャリア教育の視点の話も出たが、働いている人たちが地域を支える中で自然に子どもたちと学び合い、小さな成功事例を積み重ね、これまで意識しなかった部分を意識していくことが大事なのではないか。

- ◆ PTAの会議等で情報を得ることが多いが、各学校とも教職員の皆さんもPTAの方々も頑張っている。会議に出ると、さまざま情報を発信し、独自の活動もしていることがわかる。会議に出ることで、そのような事例を知り、自分たちの活動に生かすことができないかと考える。本当は自分がいろいろと発信しなければならぬのだろうが、多くの学校が、その部分がうまくいっていないのではないかと感じる。全国や東北の会議に出ることができるのは数人であり、出席した人がどう末端まで情報を広げていけるのかがカギであるし、どのように発信したらよいかと考えている。学校行事などで成功した事例を伝え活性化していく手段を、これからもっともっと考えなければならない。

学校から地域に戻ってみると、町内では退職世代が会の運営の中心で、次代につなげていくための30代、40代の年代が関わっていないと感じる。なぜ若い人たちが入れないのだろうか。

単体の町内会では頑張っている活動したり、会報誌も出したりしているのだが、これが連合町内会になると、それぞれの会長さんたちが顔を連ねて、連合の地域をつくるためのことしか話しかけ合っていない。町内で困っていることに対して、他の町内から意見をもらったり情報を交換するような場になっていないことが残念な点である。

連合からの要望等は市に上げることができるのだが、その部分でも情報交換がうまくいっていないのではないかと感じる。

子ども会にしる、老人クラブにしる、単体では頑張っているものの、情報交換が欠けていることから、その頑張りが発信できていない。であるから、子どもたちにも良さを伝えることができていないのではないかと感じる。

地域が楽しくなければ、地域の仕事もやりがいがないのではないかと感じる。子どもたちが地域を離れようとするときも、地域の良さを伝えられないのではないかと感じる。

県内各地のお祭りも見えてきたが、どれも素晴らしいと思う。ただ、お互いの良さなどを認め合い、共有して、県全体で盛り上げようという部分が欠けているのではないかと感じる。自分のところだけに留め置かないで、みんなで共有して盛り上げるということがないのかと考える。

審議テーマ案にある、「伝える」という部分は、広くいろんなところでいろんな人がコミュニケーションをとらないと、できないのではないかと感じる。

地域で行われている運動会などは年代別で競技が行われているが、30代、40代の参加者が少

ない。地域に人はいるのに、関わりがないから人財がわからない。

◇ 地域でのつながりのつくり方といった方法論的な部分も、報告書の中に盛り込む必要があると思う。情報を発信してどうつなげていくか、という部分ではないか。

◆ テーマ案について、「子どもたちに伝えるための」の部分で、その目的について引っかかるものがある。大きなテーマとして据えるものとしては、対象を絞らない方がいいのではないか。子どもたちという部分は、内容としてももちろん大事な部分ではあるのだが、テーマの中に入れてしまうと、狭くなってしまわないか。

「学びと」という部分は、もちろん大事なことだし、魅力を再発見するとかにつながると思う。

「活動」という部分は、違う言い方のほうがよいと思う。前回の審議会の流れからいうと、学びから実践に移ってもらおう際、動き出してもらおうためにどうしたらいいかということ、前回の審議会でも議論した。大人の姿を見て子どもが楽しそうだと思って行動するのは、「活動」という言葉でよいのかどうかわからない。

地域が元気になれば子どもたちもそれについてくるという考え方であるとするならば、地域活動という言葉もあるが、「地域づくりとは染み込み作業だ」といった人がいるらしく、働きかけられながら、地元の人が気づいていって、そこから実際に動き出して、自分たちが何とかしなければならぬと思うことが必要である。自分たちが楽しんでいる姿が影響を及ぼすという考えも同じであるし、学んだものを社会に、あるいは地域にどうやって生かしていってもらおうか、という方向の方がいいのではないか。

「生かし方」という言葉ではどうか。学ぶことで満足している所から、一步を踏み出して社会と関わって、満足度というものが出てくるものだと思う。その生かし方がわからない人は、例えば検定試験を受けてみたり、発表会に出て見たりして、学んだことを誰かに見てもらって、評価してもらわないと満足が得られない。そこからもう一步進んで社会に参画してもらおう方法を考えるというテーマではどうか。

審議テーマを決めるにあたり、提言や報告をイメージしないで決めてしまうのもどうかと思うので、もし視察に行くのだとすれば、何が優れているかといったことにも関わってくる。

◇ たたき台としてある資料の審議テーマについて議論してもらっているのだが、もうすでにこの話し合いが、テーマに沿ってできあがったものに積み重なっていくということは御理解いただきたい。要するに、テーマが決まって、どのような形で報告書をまとめますかというところからスタートするのではなく、すでに皆さんの御意見が反映されているということになるので、忌憚のない意見をたくさん頂戴したい。

「生かし方」という言葉には私も共感する。地域というのは、みんなで集まって考えて動き出さないと、地域にある課題にすら気づいてない人もいる。話をしているうちに「この部分がだめなのだ。変えなければならない」ということがわかる。実は変えることができる力もあるのだから、様々な人と交流を持つ、つながる、情報を得ることによって気が付いて解決する。解決すると評価されるし、変わってくる。それが元気の元になって、またひとつ、またひとつと取り組む力になっていくのだと思う。

そのような意味では、ただ「子どもたちに」ということではないだろうし、「活動」という言葉についても、これから議論の余地は多くあると思う。

◆ 恥ずかしながら、私自身は地域とのつながりをほとんど持っていない。今年初めて地区の運動会に参加して楽しいと感じた。これからも参加しようと思う。

学校現場では、ようやく教員の中にも学校教育だけではなく、生涯教育の意識を持つ人が増えて

きた。目の前にいる生徒が希望している進路を達成させることが教員の目標であったが、20年後なり、50年後なりに、この生徒が幸せに生きていくために、今自分たちは何をするのかといった意識を持つように変化しており、生涯教育とかキャリア教育という視点が根付いてきている。

地域の良さを考えさせることも、総合的な学習の時間等を使って、小・中・高どこでも一生懸命取り組むようになった。地域と連携した行事もたくさん行われ、10年前と比べると様変わりしている。

本校では、就職希望者は地元志向が多くなっている。昨年までは年内就職と県外就職の割合はほぼ50%ずつであったが、今年は景気が上向いたこともあり県内人数が増えたので、県内就職が7割、県外就職が3割となった。わざわざ東京へ出ていなくても、自然豊かで人情味の溢れる青森にいたいという子どもたちの気持ちの表れだと思う。以外に子どもたちは地域を愛していると思う。しかしながら、職種によっては受け入れ口がないと、地元に残るのは厳しいものがある。

これからは、今残ってくれた子たちがいずれ結婚し、子育てをして、税金を納めて初めて地域に貢献していると言えるのではないか。できることならば、会社と家庭の往復だけではなく、地域の祭りに参加したり、町内会や青年会に入って、本当の意味で地域の担い手になってほしいと願っている。

そのようなことを考えながら、案として出された審議テーマを見たとき、「地域の未来の担い手育成」、「地域のつながりづくり」というキーワードがいいと思った。お祭りを見ても、生徒とおじいさんおばあさんばかりで、中間層が抜けているというお話は他の委員からも出たが、すべての世代がつながるような、つながりづくりが求められているのだと思う。

審議テーマ案は、前回の委員の意見が反映されているうえ、構造化されて見やすくなっているの  
で素晴らしいと思った。言葉は皆さんの意見によって変わってくるかもしれないが、全体としてはとても分かりやすいテーマになっていると思う。

◇ 前回会議の後、アドバイスをいただいて事務局が作ったものである。資料の見せ方として、縦方向につながっているが、実は横方向にもつながっている。

子どもたちの進路が7対3で地元が多くなってきているというのうれしい話だが、資料の一番下の段にある「地域の未来の担い手育成」といったものは、国の総合戦略においても大きな柱として残っている部分である。我々、生涯学習審議会としても、この視点というのは大事であると思う。それが故に「子どもたちに」という言葉も出てきたのではないか。

◇ 青森県の人口は、2010年では137万人であったが、30年後の2040年には93万人にまで減り、今の2/3程度になると予想されている。これだけ人口が減る予想なので、国は全国で30万人分の雇用を地方で創出しようとしている。来年度は各市町村が国の総合戦略を踏まえ、市町村レベルの戦略を立てることになっている。そういう意味では、皆様が話し合っていることが、各市町村の戦略の中に反映されていくということが、当然のことながら望ましいと思う。

資料の一番下に「人口増へ」とあるが、これは難しいと思う。「雇用増」という言葉であれば妥当ではないか。これからの社会は、人口が減少することを前提に考えなければならない。子どもの減少や学校の統廃合など、避けられない現実というものがあり、その中でどうするかを考える必要がある。人口減少をなるべく緩やかにし、なおかつ安心して幸せに暮らすということを、ひとつの目標に掲げるとするのが妥当なのではないか。生涯学習に限ったことではないが、意識する必要がある。

人口が減っていると言われているが、それぞれの地域で暮らしている人の満足度がすごく低いのかというと、決してそんなことはない。総務省では「集落点検調査」というものを推奨しており、県においても地域活力振興課が6つのモデル地区を選び、集落点検調査を実施し、その結果から地域再生活活性化計画を立て、実践しようという取組がある。



住民の満足度は高い一方、今のままずるずる行くと不安がある。世代交代がなかなか進まないとか、将来に対する不安を持っているという現実がある。

生涯学習審議会という立場で考えるには、次のような考え方をしたらどうかと思う。それは、まず拠点をどうするのかという意識を持つてはどうかということである。また、具体的な手法について議論したらどうか。

地域課題を解決することが重要であり、課題は見えてきているので、具体的に課題を解決するためにはどのような手法があるのか、あるいは、地域の皆さんが当たり前に思っていたような地域資源を、若者やよそ者の視点でもう一度確認し、それを生かす方法や手法を考えることが、前回、今回の審議会の議論を踏まえると必要なのではないかと。

拠点について言うと、(参考資料1-3の)ペーパーの中に「小さな拠点」という言葉が出てくる。国土交通省が提唱している、基幹集落と枝集落という考え方がある。これは、人口が減り、集落単位ですべての機能を賄うのが難しくなることから、ある基幹集落に機能を集中させ、枝集落からは移動を保障するという考え方である。

審議会として考える拠点としては、公民館があるのではないかと。ただし、公民館も集約されていく可能性が高いと思われる。区割りとして小学校区がいいのか、中学校区がいいのか、それ以外の考えもあるかもしれないが、そのような施設は今後多機能化していく必要がある。生涯学習の拠点として、必ずしも公民館でなければならないというわけではないのかもしれない。それぞれの地域における拠点をしっかりしなければならない。今は一定程度満足度が高いが、行政コスト削減の論理だけで集約されていくということではなく、地域住民の意見を十分反映した形で、機能を残す拠点を押さえ、その上で地域の課題解決や地域資源の活用といったことを次世代へつないでいくような具体的な手法について、生涯学習の立場から議論するといえるものができるのではないかと。

- ◇ 話を聞いて改めて思ったのは、地域の主体は地域の住民であるということ。行政がどうこうという時代ではなく、協働していくために、地域の人たちが自ら立ち上がり、自分たちの地域を守っていく、自分たちの地域の子どもたちを育てていくという考え方を再認識した。

#### < 10分間休憩 >

- ◇ 休憩前に続いて、テーマ案についての審議、加えてその下にある4つの柱について、組み合わせて御意見を伺いたい。

実は、参考資料3として準備してあるのは、直接審議会とは関係しないのかもしれないが、県の新しい事業の紹介をしていただこうと思う。議論を聞くうちに、先に聞いた方がいいのではと思ったので、事務局より紹介してもらう。

- ※参考資料3に基づき、事務局から説明

- ◇ ありがとうございます。このような事業と生涯学習審議会の議論も、連携して考える必要性もあるのではないかと。

生涯学習課では、昨年3月に「プレ・シニア世代の社会参加活動に関する調査」において、県民アンケートを実施しているが、報告書には興味深い内容が含まれている。この調査から事業がスタートしていると考え、プレシニアという世代の地域における役割というものも、今後考えていかなければならないというのを強く感じた。

では、資料1に戻っていただき、テーマと4つの柱について、ここからは皆さんの挙手により御意見をいただきたい。

- ◆ テーマ案は全体としてはよいと思うが、「子どもたち」に限定しない方がいい。  
子どもたちもそうだが、「活動」という部分もよくわからないと感じる。全体的にぼんやりしてしまっているのではないか。  
子どもたちに伝えるための「大人の」学びだということであるが、文字にして並べてみると「大人の」というキーワードを入れた方がよいと思う。  
関心がない人も、タイトルを見て「おっ」と思うような、短くて簡単な方がよいと思う。このタイトルを若い世代にパッと見せて感想を求めたとき、単純に考えて若い人に審議会のような話し合いを大人が真剣に行っているということを知らせたい場合は、若者がいく店などにポスターを貼れば、とりあえずは見て、知ってもらえる。その際、様々な情報の中からそのポスターを見させるためには、このテーマが書いてあるポスターは、果たして留まるだろうか。  
多くの人向けというよりは、ターゲットを絞り、「君に言っているのだ」というようなものがよいのではないか。
- ◆ 「子どもたち」や「大人の学び」ということだけになってしまうと、子どもたちに伝えるためだけの大人の学びになりかねない。そうすると子どもたちは学ばなくてもよいのかということにもなってしまう。  
前回のテーマを見ても、誰が誰にということには具体的には表現されていないので、「子どもたちに」という文言は不要なのではないか。子どもも大人もという形で、あおもりの魅力を伝えるために、「学びを生かす」ということを表現できれば、全体の長さも短くなるのではないか。  
柱として挙げられている文言は、あくまで課題であると思う。その課題に対して、どのような形で進めていくかというのは、それぞれの柱を細かく見て審議するよりも、様々な団体などのネットワークを、行政もそうだが民間同士の仕組みも作っていかねなければならない。皆様からは実践者としての立場で御意見を出していただくことにより解決していけるのではないか。
- ◇ 「子どもたち」を取ってしまうと、「伝える」も不要になるのではないか。  
「ふるさとあおもりの魅力を生かした学びの在り方について」ではどうか。割愛しすぎか。
- ◆ 私も初めはそう思ったが、地域の未来の担い手育成というのが大事だという話を聞き、そうであると思った。そうすると、担い手は子どもだけではないし、「子ども」と入れようとするから気になるのだが、担い手はアクティブシニアもそうであるだろう。  
次代に向けた担い手に伝えていくという考えであれば、それもありだと思う。魅力を伝えていくということであれば、祭りのような伝承ということもよいことだと思う。そう考えると、最初は「子どもたちに伝える」という部分を外してもいいのかとも思ったが、「伝える」という部分を残したい気もある。しかし、子どもとか大人という対象を限定したくない部分もある。  
「未来の担い手」という言葉を使えばいいのではないか。  
もうひとつ、地域のつながりを大事にしていきたいということを盛り込んだ言葉があればよいと思う。
- ◇ 「地域のつながりづくり」といった文言か。
- ◆ 学んだことを地域なり自治体なり、社会に関わっていくというイメージを持てるようであればうまくいくのではないか。そうすると、下にある4本の柱がそのまま生きてくるのではないか。
- ◆ 「地域」という言葉を「地域社会」と変更すれば、広がりが出ないか。地域だと限定的である。地域社会であれば社会的なものであると思うが、どうか。

◇ 事務局に伺いたい。生涯学習や社会教育全体を考えて、「地域」と「地域社会」という文言の使い分けはしているのか。

○ 厳密に分けてはいない。学校、家庭、地域の連携という使い方を。「地域社会」という場合は、その地域の住民という限定で、学校を入れずに使う。

◆ 黒石市では逆の考え方である。「地域」は地区というような小さなエリアを意味し、「地域社会」は市全体を意味する。このようなことから、提案してみた。

◇ 地域と地域社会の定義は難しい。一般的には「地域社会」はフォーマルな感じであり、「地域」は家庭や学校、役所、商店などを意味する。どこの地域にもあるようなものの複合体のような意味づけで、話し合いの中からすると「地域」の方がしっくりくると思う。

先ほど人口増の話をしたが、もう少しお話をしたい。どこの市町村も人口、事業所数ともに右肩下がりである。後継者のいない事業所が増え、そのことが雇用の喪失にもつながっている。人口については、理想は人口増であるが、減少から増加まで持っていくのは難しいので、定住人口だけではなく交流人口を増やすとか、あるいは外へ出ていかなないように新規の雇用を作っていくなどの表現にしておく、理解の齟齬がないと思う。

学びと活動の在り方については、「学びと実践」という言葉を使うとすっきりするのではないかな。学びだけではなくて社会参加をし、実践することが根底にあると思うので、「学びと実践のプロセスの在り方について」ではどうか。

人を育成する際に、大学で勉強したりすることも必要であるが、実践の中で鍛えられて成長し、育つということがあるので、テーマということではなく、考え方として持って進めればよいのではないかな。

◇ 実践という言葉も使えると思う。先ほど出た「生かし方」というのは柱の方に入れ込み、実践をどう生かしていくかとすればどうか。

◆ 前回（第11期）も「学びと実践」がテーマだった。

◇ そうでしたか。

◇ つながっているから、考えとしてはよいと思う。

「子どもたちに伝えるための」という部分は、「未来の担い手」という表現にするということかどうか。ただ、テーマとして長くはないか。インパクトを出すことを考えれば、もう少し短くてもよいのではないかな。

「地域の良さ」と「あおもりの魅力」は別物なのだろうか。

「ふるさと」という言葉はすごくよいと思う。

◆ 「地域の良さ、ふるさとあおもりの魅力」と、2つに区切られているが、私の住む地域はなかなかつながりがなく、集落同士も離れ、合併前の旧町村同士も離れているので、地域の良さというもののイメージが湧きにくい。

何かしらのイベントをするときは「ふるさと」という言葉を使うようにしている。最初にテーマ案の「ふるさと」という言葉を見たときは生まれた場所、そして、青森県をイメージした。

「ふるさとの良さ、あおもりの魅力を」としてはどうか。自分の生まれた場所もあり、青森県もあり、イメージに合うのではないかな。

- ◆ 「伝えるための」という部分だが、魅力を伝えるための学びなのか。話の流れからいうと、良さは皆さん知っているもので、どちらかというと、良さというのはいままで残ってきたものなのではないか。とすれば、「伝わってきたふるさとの良さやあおもりの魅力」を「担い手と一緒にそれを学ぼう」というような考え方が、今お話されてきた内容ではないか。
- ◆ 「ための」があると、伝承することが目的になってしまう。
- ◆ 形を残せばいいものと、良さの中身を残せばいいものの2種類あって、テーマとしては「思い」の方ではないか。祭りとかは形あるものだから、またちょっと違うのだが。
- ◇ 「次代に伝える」だけでも十分意図は伝わる。
- ◇ 考え方として、伝わってきたものをそのまま伝えるということではないのだと思う。伝統とは非常に重要なもので、過去の積み重ねがあって現在がある。では、未来に向けてどう残していくのかという、残し方として再創造することが重要である。伝統の再創造ということになる。
- ◇ 基本的には大人が学んで、その学び方を子どもたちに伝えるのではない。子どもたちや若者にも入ってもらい、いいものをよりよくしていく。理解もそうだが新しく創造していく部分での「伝える」である。
 

なかなかまとまらないので、次回までに事務局に3つほどにまとめてもらい、その中から選ぶというのではどうか。方向性はひとつになっていると思う。いいアイデアがたくさん出た。委員の皆さんの普段の活動の広さが、たくさんの言葉になって出ているのだと感じた。

今日は結論を得るということにはならなかったが、概ねテーマの方向性と柱は見えてきたと思うので、次回の会議の前に案を提示し、会議の時には冒頭に決定して、報告書の中身に入っていけるようにしたいと思う。

改めて申し上げるが、今回の審議会はテーマを設定して、第12期審議会の報告書を取りまとめるということで進んでいくので、御協力をお願いします。

## (2) その他

※ (今後のスケジュールについて) 資料2に基づき、事務局から説明